

「IMに向けて」 松原久幸パスト会長（最後の分区代理）

IGF 都市連合一般討論会（Intercity General Forum）

近隣都市（分区）の数クラブが集まって、ロータリー情報及び教育の手段として、クラブから提出された事項について意見を出し合い討論をし、先輩ロータリアンから助言をもらい、最後に全体討論ではガバナーから選ばれた元RI役員のゼネラルリーダーが講評する。

IM（Intercity Meeting）都市連合会

近隣都市（分区）の数クラブが集まって、開かれ討論するロータリーの会合、討論内容は四大奉仕部門を踏まえて、ロータリーの特徴やプログラムを検討する。クラブ会員全員参加のこの会合の目的は、会員相互の親睦とロータリーの知識を広める事であり、更に会員にロータリー情報を伝え、奉仕の理想を勉強する為に開催される。但し決議とか決定、結論を出す必要がなく、意見交換の場である。地区大会では話し合えない、地区ガバナー、パストガバナー各地区の拡大役員といった優秀なロータリアンと意見交換が出来る。ロータリーを知る上で最も有益な会合。

職業奉仕 自分の職業にロータリー精神、つまり奉仕の精神を生かすこと。自分の職業を通じて社会（世の中）に奉仕する事。

ロータリアンが例会を通して親睦を深め、世の中に奉仕しようとする時、最も手短でしかも自分だけで出来る奉仕の機会はこの職業の場である。 1. それには職業内容を奉仕の出来る程度まで、道徳的水準を高めること

2. それから職業は単なる金儲けの手段ではなく、人間社会の分業の担い手としての報酬として金銭が用いられるのであるという職業の使命感を持つこと。

（神のおぼしめし）V o c a t i o ボカチオ＝ラテン語、天職、神の思し召し 3. ロータリーでは職業をV o c a t i o nという言葉で表現している。語源は独語のB e r u f ベルフ、神の思し召しによる仕事、神から与えられた分業の担い手すなわち天職。ロータリーの職業奉仕は、自分の職業を天職と心得て、自らの職業を通じて社会に奉仕しなければならないという事になる。

ロータリーは人づくり、人格の陶冶（性格を円満に育て上げる）

ロータリーの綱領（The Object Rotary）

ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある。

奉仕の機会として知り合いを深めること。

事業及び専門職務の道徳的水準を高めること、あらゆる有用な業務は尊敬されるべきであるという認識を深めること、そしてロータリアン各自が業務を通じて社会に貢献する為にその業務を品位あらしめること。

ロータリアン全てがその個人生活、事業生活及び社会生活に常に奉仕の理想を適用すること。

奉仕の理想に結ばれた事業と専門職に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。

ロータリーの綱領の中の4項目の解説は等しく大きな意味を持つこと、また同時に行動を起こすべきものであるという事に、RI理事会の意見が一致した。

アメリカで生まれたバター臭い理論ロータリーの理想に東洋の哲学が含まれたのは、ガイ・ガンディガーが書いた「ロータリー通解」です。

1．ガイ・ガンディガーはもともと弁護士でしたが、その後レストラン経営に転じ、その営業方法を定めるに当たって、東洋哲学的ロータリー哲学を導入した。

2．彼は企業経営者ですから利潤獲得を無視するわけにはいかないが、彼の着眼点はそれよりもレストランが現代都市の中で果たさなければならない社会的機能の理論的分析を重視した。

3．その根拠をロータリー哲学に置いた、彼のフィラデルフィア市で経営したレストランは、その良質のホスピタリティー（親切なもてなし、歓待）で他のレストランの模範となった。

4．更に彼はどう同業組合を結成し、レストラン経営者が共に栄える為にならなければならない事、してはならない事の知識を共有し、かつ企業相互の自由競争は自由競争として厳格に行うという発想の社会的な定着を図った。

5．彼はその事業の成功の後、全米のロータリアンであるレストラン経営者に呼びかけて、全米に同業組合結成を働きかけ、自らその理事長に選任され、業界の倫理基準の共通認識に立った経営方法で、共存共栄と自由競争とを達成し、レストラン業界全体の発展に貢献した。

6．ガイ・ガンディガーの業界発展の為に貢献した話は有名ですが、その達成の背景には全米各地の同業組合の理事長が全員ロータリアンであったという事も見逃せない。ロータリーのテーマ親睦と奉仕の結晶がここにある。

ガイ・ガンディガーは1915年、当時の国際ロータリークラブ連合会の「哲学及び教育委員会」の委員長として、「全職業人を対象とするロータリー職業倫理訓」をロータリアン及びロータリー運動理解の為に、一つの体系的解説にまとめ上げたものが「ロータリー通解」である。

この職業倫理訓は、11項目からなり、かなりきめ細かいもので賛否両論があった。この倫理訓については、国際ロータリーの態度は残念ながら一貫性を欠く理由のひとつは、その表現が崇高すぎる事、理念のレベルが高すぎるという理由で、当時のアメリカの厳しい経済状況の中では、現実性に欠けるくらいがあった。

「ロータリーとはロータリアンが自己の限界を自覚し、もっと転機を得さしむる人生哲学のことをいう」

ハーバート・テラーの四つのテストに依る職業奉仕

1954年第46代国際ロータリー会長、国際ロータリー創立50周年の会長

四つのテスト

- ・ 真実かどうか
- ・ みんなに公平か
- ・ 好意と友情を深めるか
- ・ みんなの為になるかどうか

この簡単明瞭な言葉の中に、ロータリー運動の尊さ、本質をみる思いがする。

1932年、債権者の依頼で倒産寸前のアルミ食品製造会社の社長就任

破産寸前の会社再建に乗り出す。

同業の会社には実績のある優秀な社員のいるライバル会社があった。

そこでテラーは考えた。この破産寸前の会社を再建する為に何が一番大切か、それは役職員を始め従業員一人一人の意識を代えること。

その為には全員一丸となって取り組むための共通の信念、理念が必要。

会社再建に必要なものとして ・企業合理化 ・生産性の向上 ・製造過程の見直しなどが要求される。

テラーはこの必要条件を実施する為には、人材の育成が不可欠であると考えた。人間の精神を高める為にはどうしたら良いか

そこで考案されたのが、四つのテスト

この四つのテストの中で最も大切な第一のもの、初めに考えなければならないもの、それは「真実」という事だった。真実の一つ、この一つの真実の為に客観性があり、信頼が生まれ、多数の人がこれを拠りどころとして、心を一つにすることが出来ると考えた。しかし真実だからといって直ちに行動に移せるとは限らない、それを決定する原理として「公平」「好意と友情の強化」「有益」

=みんなの為に becoming かどうか=の原則が必須となってくる。これらの四つの基準に照らして絶えず自分の行動を確かめ、反省しながら経営を行った。幸いな事に4名の重役が宗教上の宗派は異なるが真面目な人達で、このアイデアに賛成し協力してくれた。これを実践する事によって、当初銀行から6000ドルの借入れをして始めた経営が、10年後には100万ドルの配当金を出せるまでに発展した。テラーは、RI会長就任のターゲットにこの「四つのテスト」を掲げて、全世界のロータリアンにこの基準に従って行動する事を提案した。